

「天地自然の道理」

神の御意みごころは大自然の愛といってよい。その愛の実態から造化の御力として迸りほとばし出るものが神智である。神智はいわば造化の方便である。太陽を觀てもうなづかれる。太陽自体は熱の固まりであるが、力を地上に及ぼす時は、光となって走り来て地上に止まっている。その光の当たった処にそれ相応の熱を残している。この熱が即ち生命である。神は萬物に光を與え、神智をもつて造化し給い、その光の止まるところに御自身の面影・実態なる愛をそれぞれ宿し給うている。そして造られた萬物は、それ相応の神性を分かち與えられている。太陽の光線をもたらし與えている熱で植物が生長している姿を觀れば、この理ことわりが覺れる。人は光線に該当する玉の緒によって神から神性を分かち與えられている。この故に人の心の本体は愛である。その愛が他に働く手段、即ちそれは智となって働く。人は玉の緒を通して絶えることのない神智である御意を撰受することによって生命を保ち、心の本体を養っているのである。

如何に高遠な神から来る精神を受け取っても、我が心がそれを理解しないと心には入らない。自分の生命を支配する心の実体に溶け込まないから直ちに失われらる。即ち単に心の表面である知識の世界に止まるだけである。人は靈主れいしゅたいじゆう體従の原則に従って、天体の天文に大自然の生活の顛あちわれをきわめると、宇宙大教育を受けまた光を受けて心の本体に溶け込ませ消化して、心を正しく養い向上することが出来る。これが一度ひとたび逆転して體主たいしゅれいじゆう靈従となつて、心が肉體の僕しもべとなつて仕えることになる。反対に知識の地獄から来る虚偽を受け入れて、悪を蓄たくえることになる。今日の人は殆ど體主靈従に陥つてしまつている。自分を愛してくれた人を愛して、神には背を向けていないか。神を愛し、他を愛し、道を愛する天地自然の道理に叛そむいてるのである。人は知識の働きで進めば進むほど地獄に墮ちるだけである。遂にはこの世全体が破滅するよりほかないのである。

神性と心性の關係を明らかにすれば、科学を悪用することの大きな誤りに気がつくのである。知識人の努力で科学を發達させ、産物の開發・進展を計ることに賛成するのは吝ちかかではないが、科学のため地獄に陥らないよう警告せざるを得ないのである。